*Lutèce*第24号抜刷
1994年12月31日発行

空間的描写
——その定義とカテゴリーの設定——

小栗栖　等

大阪市立大学フランス文学会

空間的描写
——その定義とカテゴリーの設定——

小　栗　栖　等

一、序　　論

ここ数年間の私の論文および口頭発表の多くは、中世の諸作品における認識とディスクールの関連にかかわるものであった。反復技法に関する二つの論文[注1]においては、近代文学とは異なった、中世、とりわけ十二世紀の武勲詩諸作品の、時間の概念が問われていた。言うまでもなく、時間とは人間の認識において最も基本的な枠組みをなすものである。しかし、これだけをもって、中世の認識の世界に分け入ることは許されないであろう。カントを引き合いに出すまでもなく、空間もまた人間の認識の基本的枠組みであることは容易に理解され得るからである[注2]。したがって、中世諸作品における時間認識の考察にあわせ、空間認識の考察をも行わねばならない。

ところで、すでになされた中世の時間認識の考察が反復という一つの文学技法との関連で行われていたのと同様、空間認識の考察もまた一つの文学技法との関連で行われなくてはならない。すなわち、時間認識の考察が反復という技法に結び付く諸テクストの断片にかかわるものでしかなかったのと同じく、空間認識の考察も諸テクストの断片にかかわるものでしかない。しかし、それは本考察の短所と言うよりもむしろ長所と言うべきであろう。諸テクストの総体を対象とする考察は結局のところ、情報の無秩序な羅列しかもたらさないからである。それゆえある特定の文学技法に着目することは、テクストのもたらし得る無限の錯綜した情報を有限化し秩序化するにあたって有効だと考えられる。

ただしそのためには、諸テクストの諸切片を体系的に切り取り、切り取られた諸切片が数量化とは言わないまでも、ある程度の分類が可能なほどには、その特定の文学技法が十分に形式化されていなければならない。しかし現在までのところ、空間に関わる文学技法は十分には形式化されていないように思われる。そこで中世の空間認識を問うにあたって、まず最

注1「ロランの歌の反復について----武勲詩の技法に見る中世の他者性----」（『フランス語フランス文学研究』、61号、1992、pp. 1-12）

「Jean Rychnerの〈反復〉の概念再考」（『LUTECE』、22号、1992、pp. 20-37）

注2むろん、時間の観念のないとされるヌアー族などの例がないわけではない。しかし、さしあたって、中世ヨーロッパの人々に時間や空間の観念がなかったと考える根拠はないように思われる。

初に、空間に関わる文学技法を形式的特徴に従って定義しなければならない[注3]。本論が行うのは、そうした意味での予備考察、すなわち、空間的描写の定義ならびに、その下位区分の設定である。

二、空間的描写の定義

空間に言及する際の文学技法の定義を行うとなれば、なによりも先に、空間に言及するとはいかなることであるのか、を決定しなくてはならない。それは手短に、諸物体の視覚的特徴および配置の記述だということができよう。しかしながら、これは空間描写の定義にはなりえても、本論の目的を満たしえる空間的描写の定義にはなりえない。なぜなら、登場人物の行為を語ろうとすれば、それが空間に関わる限り、表現は必ずや何らかの空間性を帯びることになるからである。

Guillelmes monte molt acesmeement, Etrier n'i baille n'a arçon ne se prent. Prent son escu et a son col le pent; L'espié brandist par si fier maltalent, Lance a fermee a l'enseigne qui pent. (*Couronnement de Louis*, vv. 867-871)	ギヨームはきわめて優雅に馬にまたがる。 あぶみもとらず、鞍の前輪に手をかけもしない。盾をとると、首にそれをつるし、 猛々しい敵意をむき出しに、槍を振り回すが 槍にはのぼりが結わえられて垂れ下がっていた。

上の文章ではギヨームがどのような武装をしていたのかがわかり、その意味では空間性に満ちている。しかし、最後の一行を除いては、ことごとく状態よりも動作の方に叙述の主眼がおかれている。こうした事例を空間的描写とみなすならば、テクストのほとんどの部分を考察対象にしなければならないという不合理が生じる。のみならず、結局のところ、テクスト間の偏差が近代と中世の間においてさえも僅少になるという方法論上の誤謬を犯すことになる。中世諸作品の間ひいては、近代と中世のテクストの間に見られる空間表現の傾向の偏

注3　これまでに行ってきた時間認識の考察においては、この点に関し、Jean Rychnerの考察に多くのものを負っていたことを認めなくてはならない。空間に関してもRychnerは、死後出版となった *La Narration des Sentiments, des Pensée et des Discours dans quelques œuvres des XIIe et XIIIe siècle* (Droz, 1990)において、描写を取り扱っている。ただし、彼の描写の概念は範囲が広く、本考察には適さない。また、描写を取り扱った「物語論」としては、Gérard Genette の《Discours du récit — éssai de méthode —》(in *Figure III*, Seuil, 1972)がある。特に、「情景法」に関する考察は、本論の「空間的描写」の概念を形成するにあたって、有益な示唆を与えてくれた。しかし、細かい概念規定についてはGenetteも手をつけていない。

差を考察するのが本論の最終目的なのである。したがって、空間的描写の定義からは、登場人物の行為により空間が喚起されるような事例を除外しなくてはならない。

むろん、これによって失うものも少なくない。

Par les fenestres le gietent el vergier Sor un pomier, que par mi l'ont froissié. (*Charroi de Nîmes*, vv. 749-750)	窓から彼を果樹園のなか、りんごの木の上に、放り出し、彼は真っ二つに引きちぎられた。

上の条りでは、宮殿の窓が果樹園に面し、そこにはりんごの木が生えていると言った具合に、諸物体の配置が記述されているが、こうした事例は除外されることになろう。また、軍隊が移動する際に地名が羅列されることもあるが、この内容的には武勲詩に独特の記述も除外されることになる。しかしながら、本論の考察の目的があくまで、あるテクストの空間描写の総体を捉えることではなく、空間表現の一部に見られる、諸テクスト間の偏差を捉えることにあるとすれば、形式上いつの時代にも、どのテクストにもありふれているものに目をさえぎらせることは、物事の本質を見誤ることにつながる。それゆえ空間的描写の定義を、「登場人物の行為から切り離して、諸物体の視覚的特徴および、位置関係を述べたもの」とするべきである。

三、空間的描写の単位

すでに述べた通り、本考察では、文学技法をテクストの特定部分を分類可能な形で切り出す形式的定義とみなす。そうである以上、まず、何をもって「一つの」空間的描写と見なすかを定義する必要がある。しかしその前に、いくつかの問題を予備的に解決しておかねばならない。まず第一に、空間的描写のカテゴリーを設定する際に、諸タイプ間に等価性を要求するのか、しないのかが、問題になる。もし各カテゴリーの間に互換性が成り立つのであれば、描写の単位の定義は一つで事足りることになる。これは理論的には可能なように思われる。たとえば、A est Bという表現とABという表現[注4]をともに一単位の空間的描写とみなす場合、ここにある程度の等価性を認めることはできよう。つまり、詩法上、文法上の違いを捨象すれば、この二つの表現の言わんとしていることは同じであると言うことになる。しかし、このチョムスキー風の発想は理論的なものでしかない。描写は必ずしも上のような定式

注4 この場合、A は名詞を Bは名詞修飾語を表わしている。

にしたがっているわけではないし、A,Bそれぞれにあたる要素が複数存在する場合もあるからである。したがって、各カテゴリー間に互換性、すなわち等価性を要求することは実事上不可能であり、描写の単位は各カテゴリーごとに定義しなくてはならない。

では、カテゴリー内の等価性についてはどうだろうか。こちらは理論的にはもちろん、実際的にも可能である。ただし、そのためには相当に細かいカテゴリー分けを行わなければならない。時にはたった一つかあるいはわずか数個の事例のために一項目が必要になる。とすれば、分類はいたずらに繁雑になり、比較研究の用をなさないであろう。結局、カテゴリー内部の等価性も近似的なもので満足するほうがよいということになる。つまり、各カテゴリー事例数の比較はあくまで参考程度のものであり、各作品の空間的描写の傾向を調べるには個々の作品の詳細な考察を要するのである。

四、カテゴリーの抽出対象となった諸作品

あらかじめ断わっておかなくてはならないのは、以下に挙げる空間的描写のカテゴリーは、事実上のものであって、理論的なものではないということである。すなわち、諸テクストから空間的描写の定義に適うものを全て取り出してきて、分類し、抽象化したのが以下のカテゴリーであり、その定義である。それゆえ、理論的には他にもカテゴリーの存在する可能性がある。カテゴリー抽出のために用いられた作品と、その刊行本は以下の通りである。

Le Couronnement de Louis —Chanson de Geste du XIIe siècle —, Editée par Ernest Langlois, 2e édition, Champion, "C.F.M.A.", 1984

Le Charroi de Nîmes — Chanson de Geste du XIIe siècle —, Editée par Duncan McMillan, 2e édition, Klincksieck, 1978

La Prise d'Orange —Chanson de Geste de la fin du XIIe siècle —, Editée par Claude Régnier, 6e édition, Klincksieck, 1983

Béroul Le Roman de Tristan — Poème du XIIe siècle —, Edité par Ernest Muret, 4e édition, Champion, "C.F.M.A.", 1982

Les Lais de Marie de France, Publiés par Jean Rychner, Champion, "C.F.M.A.", 1983[注5]

Le Roman de Renard, Texte établi et traduit par Jean Dufournet et Andrée Méline, Flammarion, 1985[注6]

[注5]ただし、*Guigemar, Laval, Yonec*のみを対象とした。なお、ここに挙げた以外の刊行本および現代フランス語訳も参照したが、紙数の関係上省略した。

[注6]ただし、Branche II, vv. 1-1396のみを対象とした。

Les Romans de Chrétien de Troyes, Editée d'après la copie de Guiot IV— Le Chevalier au Lion (Yvain) —, Publiée par Mario Roques, Champion, "C.F.M.A.", 1971[注7]

更に、カテゴリー抽出の後、以下の諸作品によってカテゴリーの適用を試みたが、これらの作品には新たなカテゴリーは見つからなかった[注8]。

La Chanson de Guillaume, Editée par François Suard, Bordas, "Classiques Garnier",1991
La Chanson de Roland, Editée par Cesare Segre, Droz, "T.L.F.",1989
Aliscans, Publié par Claude Régnier, Champion, "C.F.M.A.", 1990
Enéas —Roman du XIIe siècle —, Editée par J.-J. Salverda de Grave, Champion, "C.F.M.A.", tome I 1985, tome II 1983,
La Vie de Saint Alexis —Texte du Manuscrit de Hildesheim (L) —, Publié par Christopher Storey, Droz, " T. L. F.", 1968[注9]

五、空間的描写のカテゴリー

0. 若干の用語の定義

各カテゴリーの考察に入る前に、定義で用いられる若干の用語をあらかじめ説明しておくことにする。

まず第一に、本論に用いられる文という用語は、述語動詞（時には省略されている）を中心とした、主語－動詞－補語（目的格補語、状況補語、属詞など）という連辞をあらわしている。そして、その文が主節であるか従属節であるかは、名詞を修飾する関係節とqueに導かれる名詞節を除いては、区別しない。したがって、理由、場所、時間、結果を表わす副詞節などの一文は、主節の一文と同等の価値を持つ。

注7 本論中の事例はすべて、以上の七つの刊行本、九作品からとられている。なお、引用中のすべての強調、およびテクストの翻訳は論者によるものである。

注8 ただし、これらの作品の空間的描写はなおもカード化が終了しておらず、今後新たな下位カテゴリーが加わる可能性がないわけではない。

注9 少なくともここに挙げられた諸作品に関しては、以下に述べる分類にしたがって、各論を発表する予定である。なお、上記作品の他に少なくとも次の作品の検討を予定している。

Le Voyage de Charlemagne à Jérusalem et à Constantinople, Publié par Paul Aebischer, Droz, "T. L. F.", 1965

Gormont et Isembart —Fragment de Chanson de Geste du XIIe siècle —, Edité par Alphonse Bayot, 3e édition, Champion, "C.F.M.A.", 1969

第二に、動詞に関して用いられる、「登場人物の行為を表わす」と「登場人物の状態を表わす」という表現は、過去時称にした場合に、現代フランス語の基準で、それぞれ直説法単純過去になるか直説法半過去になるかによって使い分けられている[注10]。

第三に、名詞という用語は、実詞、代名詞、名詞化された形容詞などを含んでいる。

最後に、形容詞という用語は、名詞修飾語一般を意味しており、通常の品質形容詞、関係詞による形容詞節、前置詞による形容詞句はもちろん、述語動詞が状態を表わす場合には、副詞、副詞句をも[注11]意味している。

Ⅰ. 付加形容詞による空間的描写: カテゴリーPa

定義：述語動詞が登場人物の行為を表わしている文中での、「名詞＋その名詞の視覚的状態および、位置関係を表現する限定用法の形容詞」のカップルを一単位とする。

ただし、名詞あるいは形容詞のいずれかが二つ以上であっても、これを一単位と数える。また、両方が二つ以上であっても、意味上一群をなす場合（配分的でない場合）は、これを一単位と数える[注12]。

検討した諸作品に見られる空間的描写のうち最も単純なこのカテゴリーには、以下の下位カテゴリーが認められる。

注10 現代フランス語では、直説法半過去が物語の背景を述べ、直説法単純過去がその背景上の事件を述べるという対立的な用法がある。これを利用するわけである。ところで、現代フランス語と古仏の時称の対応関係は単純ではない。古仏では、単純過去形態はむしろ汎過去の価値をもっており、現代フランス語の単純過去の用法に加え、描写の半過去、現在と関わりをもつ複合過去の（たとえば経験を表わす）用法を併せ持つ。また、大過去も、古仏では過去の一時点の状態を表わしていることも少なくない。それゆえ、古仏のテクストに対する現代フランス語の時称体系の適用は、それ自体若干の解釈を要するものであって、メカニックに行えるものではない。

注11 たとえば、Devers le burc sunt li mareis (*Yonec*, v. 365)：「街のかたわらには、沼地があった」の「街のかたわらには」がそうである。

注12 こうした事例はいまのところ見つかっていない。一方、名詞と形容詞のいずれかが二つ以上になるとは、次のような事例を意味している。De sa moillier out deus enfanz, / *un filz e une fille bele*. (*Guigemar*, vv. 34-35)：「［ギジュマールの父は］妻により二人の子供を得た。美しい男の子と女の子であった」古仏では、二つの名詞にかかる形容詞は近いほうの名詞にのみ一致することがある。直後にギジュマールの美しい様が語られるという文脈を鑑みれば、「男の子」にも「美しい」をかけるほうが自然である。

① 形容詞が名詞の状態を表現しているタイプ: Pa qual.タイプ

Cort en la Chambre desoz *le pin ramé*, (*Prise d'Orange*, v. 935)	彼は部屋の中、生い茂った松の木の下に駆け寄った。

カテゴリーPaのなかで、最も理想的なタイプである。形容詞の表わす内容は述語動詞の表わす行為と全く関係がない。すなわち、「駆け寄る」という動作にとって、「松の木の下に」という要素がほとんど必然的に必要となるのに対し、その「松の木」が「生い茂っ」ていたことは関わりのないことなのである。むろん松の木が生い茂っていたことが、駆け寄る動機になることは十分に有り得る。しかしここで問題にしているのは、物語内部での関連ではなく、表現という形式あるいは文法レヴェルでの関連である[注13]。このタイプでよく用いられる形容詞は、品質形容詞と関係詞節であり、aやdeの前置詞句が用いられることもある。

② 形容詞が、名詞の位置関係を示しているタイプ: Pa pos.タイプ

Par *une broce lez un plein* S'en vait fuiant tot une sente. (*Renard*, vv. 464-465)	[ルナールは] 野原の傍らの茂みを横切ると小道沿いに逃げ去る。

ここでもやはり、「逃げ去る」という行為とは独立して、「野原の傍ら」に「茂み」があったことが語られている。このタイプでよく用いられる形容詞は、前置詞句と関係詞節をともなった前置詞句である。

③ 主語が視覚的状態を表現する状況補語をともなう場合：Pa suj.タイプ

Et *Renart* celle part s'adresce, Tout coiement, *le col bessié*; (*Renard*, vv. 50-51)	ルナールはそちらのほうへ近づいていく、そろりそろりと、頭を低くして。

もちろん、このタイプを空間描写のカテゴリーに組み入れる危険に気付いていないわけではない。まず、「頭を低くして」という表現は主語にかかる形容詞句ではない。さらに、こ

注13 「松の木の下に」という表現も、空間性を有していないわけではない。すでに述べたとおり、このように動作に深く結び付いた事例までをも空間的描写に含めることは、本論の目的に反するがために、空間的描写の定義から除外されているのである。

れは副詞的な働きをもって動詞にかかっており、その点で動詞の表わす動作と、文法あるいは表現のレヴェルで深く関わっている。しかしながら、頭を下げて這いよっていくルナールを生き生きと描く、この表現を捨て去ることにもまして、この種の表現を比較的よく用いる『狐物語』の表現法上の特徴[注14]を見逃すのは、本論の趣旨に反する。各作品間の表現特徴の偏差を割り出すこともまた、本考察の目的の一つなのである。

II. 知覚内容としての空間的描写：カテゴリー Pp

定義：述語動詞が登場人物の知覚（むろん視覚に限定されるが）を表わす一文中で、知覚対象の視覚的状態、位置関係を示す形容詞が、知覚対象を示す名詞を直接修飾しない場合、知覚対象を示す語とそれを「間接的に」修飾する形容詞のカップルを一単位とみなす。

ただし、形容詞と知覚対象のいずれかが二つ以上である場合や、両方が複数個で一群をなす場合にも、これを一単位と数える[注15]。

登場人物の知覚の内容として物体の視覚的状態や、位置関係が述べられることがある。この時、形容詞が名詞に直接かからないことがある。そこで別にカテゴリーをたてる必要が生じる。[注16]。上記のような事態は以下の三種類に大別される。

① 知覚動詞の目的格補語が目的格属詞をとる場合：Pp atrib.タイプ

Il regarda contreval le regne,	彼は所領を見下ろし、草が青々とし、
Voit *l'herbe fresche* et *les rosiers plantez,*	バラの木が満開なのを眺めた。

注14『狐物語』は、Pa pos. とPa suj.の事例数の総計がPa qual.と同数になるが、これは他の作品に見られない高比率である。

注15 形容詞と知覚対象がともに複数で意味上一群をなす事例はいまのところ見つかっていない。意味上一群をなさず、複数の単位として数えられる事例については、次のPa atrib.タイプの用例を参照されたい。

注16 したがって、たとい述語動詞が知覚動詞であっても、形容詞が名詞に直接修飾を加えているような場合には、カテゴリーPa となる。たとえば、L'umbre d'*un grant oisel* choisi (*Yonec*, v. 106)「一羽の大きな鳥の影を認めた」や En mi la nef trovat un lit /Dunt li pecul e li limun /Furent a l'ovre Salemun /Taillié a or, tut a triffoire, /De ciprés e de blanc ivoire.(*Guigemar*, vv. 170-174)「船の中央に寝台を見つけたが、その支柱も横板も、ソロモン風に、金を彫金し糸杉と白い象牙に象眼したものだった」は、いずれも、Pa qual.タイプである。

(*Prise d'Orange*, vv. 49-50)

定義により、二単位のPp atribタイプが認められる。この場合、形容詞を限定用法とすることも可能であるが、冒頭に叙情詩に由来する初夏のモティーフ[注17]を持つ、この作品中にあってはむしろ、形容詞を目的格属詞にとるほうが自然であろう。もっとも、このカテゴリーのほとんどの事例では目的格補語が代名詞化されており、構文法に曖昧なところはまったくない。

② 知覚動詞が不定法を従え、その意味上の主語が属詞、状況補語を伴う場合:Pp inf.タイプ

Li cuens Guillelmes vit venir *l'aversier,* *Lait et hisdos et des armes chargié;* S'il redote, nuls n'en deit merveillier. (*Couronnement de Louis*, vv. 673-675)	ギヨームは異教徒がやってくるのを見た。 敵は汚く、醜悪で、武具を満載していた。 ギヨームが恐れを抱いたとしても、驚くにはあたらない。

知覚対象が一つしかないこの事例は、定義により、一単位と数えられる。ところで、ここでも構文法の曖昧さが生じている。つまり、「汚く、醜悪で、武具を満載して」を、「異教徒」に対する限定用法の形容詞と考えることも可能である。そしてこのタイプでは、不定法の意味上の主語、すなわち知覚動詞の目的格補語が、代名詞化された事例は見当たらない。それゆえ、これをPa qual.とみなすことも可能である。

③ 知覚動詞が上記二タイプ以外の構文法をとる場合：Pp？ タイプ

Quant vit qu'*ele avoit sa chemise* Et q'*entre eus deus avoit devise,* *La bouche o l'autre n'ert jostee,* (*Tristan*, vv. 1995-1997)	［マルク王は、］彼女が肌着をつけ、 二人［トリスタンとイズーの］の体が離れており、互いの唇が合わさっていないのを見た時、…

現代では存在しない構文法であるが、このように知覚動詞がque節をとったり、その他の理由で、空間的描写と呼びえるにも関わらず、上記二タイプのいずれにも属さない事例が若干存在する。そうしたものをこのタイプに分類することとする。中には、以下のような特異な

注17 Ce fu en mai el novel tens d'este (Prise d'Orange, v.39)と類似の詩行を持つ「初夏のモティーフ」は、ほかに *Charroi de Nîmes* や *Yonec* にも見られる。

ものも含まれている。事例ごとの検討が必要であろう。

L'espee prent com home iriez, *Regarde el brant, l'osche ne voit:* (*Tristan*, vv. 2080-2081)	［トリスタンは］猛り狂った男のように剣を掴み、刃を眺め、刃こぼれのないのを見た。

Ⅲ. 語り手のセリフとしての空間的描写：カテゴリー　N

定義：明示的もしくは暗示的に語り手が介入して、物体の配置や視覚的特徴を述べるような一文を一単位とする。

周知のとおり、中世の作品には語り手の介入が多い[注18]。その際に空間的描写が行われるわけであるが、何をもって語り手の介入とするかが判断の難しいところである。しかしながら、少なくとも本論で考察した作品内では、語り手の介入と空間的描写が結び付くのは、以下の二つのタイプに限られ、表現・文法レヴェルでの定義は比較的容易である。

①　語り手もしくは聞き手を指示する文法的要素が明示されている場合：N pers.　タイプ

La dame gist lez sun ami: *Unke si bel cuple ne vi!* (*Yonec*, vv. 191-192)	奥方は恋人のそばに横たわっていた。 こんなに美しい恋人たちを私は見たことがない。

ここでの述語動詞「見る」は一人称単数形になっており、その限りにおいて、イタリック体の一文が語り手のセリフであることはまちがいない。こうした事例以外にも、「私の考えでは〈mon escient〉」といった成句で語り手が指示される場合もある。このタイプでは必ず、文法的に明示された一人称あるいは二人称が、語り手あるいは聞き手（読み手）を指示している。

②　語り手の判断が介入する場合：N jug.　タイプ

注18 武勲詩ジャンルに関しては、これを「ジョングルールのセリフ」と呼ぶことが多い。しかし、武勲詩作品とジョングルールの関係はいまだに議論の多いところであるうえに、現代の物語論では、作者と物語の語り手を区別するのが一般的であることから、本カテゴリーの名称を採用した。

このタイプでは、空間描写が語り手の判断を述べる一文中に展開し、N pers.タイプとは異なって、語り手が文法的に指示されることはない。それだけに、いくぶん恣意的な印象を与える。しかし、このタイプに適合する事例はきわめて限られた構文法をとる。

Quant il fu vestuz de nuvel, *Suz ciel nen ot plus bel dancel!* (*Lanval*, vv. 175-176)	彼［ランヴァル］が、新たに服を着ると、 天の下には、これ以上美しい若者はないほどであった。

校訂者、ジャン・リシュネルが感嘆符を付していることからもわかるとおり、こうした類の表現が語り手の介入の一種であることは広く認められている。世界中の若者を見るのが不可能な以上、語り手の主観的な判断であることは明らかだからである。たとい、「天の下で」が「王国中で」に代わっても、事情は変わらない。

同様に主観的判断の入り交じった空間的描写としては、感嘆文をあげることができよう。語り手の判断の入り交じった空間的描写は、ほかにも若干例存在するが、各作品の個別検討の際に取り扱うこととする。

Ⅳ. 状態を表わす述語動詞による空間的描写：カテゴリー　NM

定義：述語動詞が登場人物などの状態を表わし、それに続く形容詞、目的格補語とともに、主語の視覚的状態、位置関係を表現する一文を一単位とする。

ただし、連続した事例において、二つ目以降の文の述語動詞が省略されている場合には、省略された述語動詞が存在するものとして単位を数える。

以上の定義により、描写の単位数は、省略されたものを含めた述語動詞の数によって決まる。以下の事例引用中では、述語動詞を、そして述語動詞の省略されている場合は、省略の起こっている「一文」を強調することとする。

このカテゴリーは構文法により、以下の五種類に分類される。

①　述語動詞と目的補語によって主語の視覚的状態を示す場合：NM obj.　タイプ

Portent corroies et gueilles et baudrez, *Portent* granz borses por monnoie changier, *Chevauchent* muls et sonmiers toz gastez. (*Charroi de Nîmes*, vv. 1024-1026)	［荷車を卒いる人々は］革帯、革袋、肩帯を身につけ、両替用の革財布を下げ、 ひどくくたびれた雄ラバや荷馬にまたがっていた。

動詞の省略はないので、定義により三単位のNM obj.タイプを認めることができる。

このタイプでは上の事例のように[注19]、登場人物の身につけているものを表わすことも多いが、体の一部あるいは全部の視覚的特徴を表現するのに使われることのほうが多い。その場合、述語動詞には普通aveirの単純過去（汎過去）形が用いられる。

A tant ez vos un paien, Orquanois; Noire *ot* la barbe, si *ot* chanu le poil Et *blans sorcils*, si lor juge lor droiz. (*Prise d'Orange*, vv. 1140-1142)	そこへ一人の異教徒、オルカノワが現われた。髭は真っ黒、ところが髪は真っ白、 そして眉毛も真っ白だったが、彼は異教徒たちに何をなすべきかを教える。

なお、三番目の斜体部分では動詞aveirが省略されていると考えられるので、この事例にも三単位のNM obj.タイプを認めることができる。

② 述語動詞と主格属詞によって主語の視覚的状態を示す場合：NM atrib.タイプ

La porte *fu* molt haute et lee, (*Chevalier au lion*, v. 907)	門はきわめて高く、大きかった。

動詞の省略は認められないので、空間的描写は一単位だけである。

この構文法に用いられる動詞はきわめて限られいる。estre, sembler以外の動詞が用いられる事例は今のところ見つかっていない[注20]。

このタイプには、たとえば、covrir, vestir などの動詞の受動態構文も含まれる。

注19 念のために補足しておくと、「ひどくくたびれた雄ラバや荷馬」という表現はPa qual.タイプではない。述語動詞が主語の状態を表わしているからである。上の事例では時称は物語的現在であるが、もし過去を表わす時称で現代語訳を行えば、直説法半過去を用いるべきところである。そして、カテゴリーNMでは、すべての事例について同じことがいえる。カテゴリーPaの述語動詞は、定義上すべて登場人物の行為を表わしているので、一つの事例が同時に二つのカテゴリーに属することはありえない。

注20 動詞が登場人物の行為を表わすようなものである場合は、Pa suj.に属することになる。

Vestues furent richement,
Laciees mult estreitement
En deus bliauz de purpre bis;
(*Lanval*, vv. 58-59)

彼女［妖精の乙女］たちは豪華に着飾り、
二人とも濃い紫のチュニックをぴったり
身にまとっていた。

こうした受動態構文が空間的描写であるためには、当然ながら、何らかの視覚的情報をもたらす副詞（「豪華に」、「ぴったりと」）や前置詞句（「濃い紫のチュニックを」）を伴っていなくてはならない。この長い事例も、動詞の省略が認められない以上、定義により一単位のNM atrib.タイプである。

③　述語動詞と前置詞句、副詞によって主語の位置関係を示す場合：NM pos.

Devers le burc *sunt* li mareis
E les forez e li difeis.
De l'autre part, vers le dunjun,
Curt une ewe tut envirun;
(*Yonec*, vv. 365-368)

町の傍らには、沼地、
そして、森、禁猟地があった。
別の側には、主塔のまわりを囲んで
川が流れていた。

ここでも、述語動詞の省略は認められないので、NM posは一単位である。
前置詞句が副詞の場合もあるが、そうした事例の数は今のところわずかである。

④　二重否定を用いた空間的描写：NM doub.　タイプ

N'i a nul d'aus deus qui n'*ait* un
baston cornu de cornelier,
qu"il orent fez aparellier
de cuivre, et puis lïer d'archal.
(*Chevalier au lion*, vv. 5508-5511)

彼等［ネプテューンの息子］二人のうちで、
ミズキ材でできっ突起のついた棍棒を持たな
いものはなかったが、その棍棒を、彼等は銅
でくるませ、真鍮のタガで補強させていた。

ここでは二重否定を際立たせるために直訳したが、もちろん、「二人とも……棍棒を持っていた。」という意味である。したがって本来、このタイプの事例はNM obj.タイプに属している。しかし作品間で興味深い偏差を示すので、区別して扱うこととする。

⑤　述語動詞が視覚的状態を表わし、なおかつ上記タイプ以外の構文法をとる場合：NM？

上記四タイプ以外の構文法で、状態を表わす述語動詞がなんらかの視覚的状態を表わす事例の数は多くはないにせよ、作品によっては無視できない数にのぼる。分類よりも事例ごとの個別的な検討によって考察されるべきであろう。

En une lande, a une part *Ourent ars* li vilain essart; (*Tristan*, vv. 3035-3036)	荒野の一角では、未開墾地が 百姓達によって焼き払われてしまっていた。

述語動詞は大過去形で、過去の一時点（物語における現在）における状態を表わしている。問題であるのは、その述語動詞が表わしているのが主語ではなく目的格補語の状態だということである。

V.登場人物のセリフのなかの空間的描写：カテゴリー　D

定義：直接話法、間接話法、自由間接話法を問わず、登場人物のセリフ（内面の独白を含む）の中に、上記四種のカテゴリーが見られる場合、各カテゴリーの定義に従い一単位の空間的描写と数える。

以上の定義により、本カテゴリーの中には、各カテゴリーに相当する、下位カテゴリー(タイプ）と、各カテゴリーの下位カテゴリーに相当する下位タイプが設定されるが、定義上混乱を生じる場合を除いては、以下での説明を割愛する。

①登場人物のセリフ内での付加形容詞による空間的描写: D pa　タイプ

〉 Delez un marbre vi lor segnor bessié; 〉 Bien le connui au *bon heaume verigié*, 〉 A *l'escharbocle qui luisoit el nasel.* (*Charroi de Nîmes*, vv. 243-245)	私は大理石の壁のそばで敵の君主が身を潜めているのを見ました。縞模様の兜と鼻あての上に輝くザクロ石で敵の君主であることがはっきりとわかったのです。

②登場人物のセリフ内での知覚内容としての空間的描写：D pp　タイプ

〈*De vostre brant* vei *sanglent tot l'acier,*…　「あなたの剣の刃が血に濡れているのが見えます……
(*Couronnement de Louis*, v.2191)

③登場人物のセリフ内での語り手のセリフとしての空間的描写：D n　タイプ

語り手の判断を含む空間的描写がセリフ内に展開する場合、すなわち、D n jug.の場合、判断基準は本来の下位カテゴリーN jug.に準じることができる。むろん、それ自体が曖昧なものであることはすでに述べたとおりであるので、個別検討がぜひとも必要である。しかし、このタイプで判断に困難の生じるのは、むしろ、サブタイプD n pers.、すなわち、語り手ー聞き手の審級が一人称、二人称で表わされる場合である。たとえば、上のD ppタイプの事例にも、一人称が用いられている。何をもってサブタイプD n pers.とみなすかを説明しておかねばならない。

確実に排除されるのはまず、述語動詞が過去を指示する[注21]場合である。この場合明らかに、一人称あるいは二人称は、語り手ー聞き手の審級を指示するのではなく、セリフの中で語られる物語の登場人物としての聞き手であり、語り手である。それに対して、反実仮想や命令を表わす文の場合には、一人称や二人称は、セリフが発せられている時点での語り手や聞き手を指示している。

〉 *Se veïez le palés de la vile*
〉 *Qui toz est fez a voltes a lices!*…
(*Prise d'Orange*, vv. 269-270)

「もしあなたが丸天井とモザイクの縁どりで造られたあの町［オランジュ］の宮殿をご覧になったなら。……」

一方、時称が現在を指示する[注22]時には常に、一人称や二人称は、セリフが発せられている時点での語り手や聞き手を指示すると同時に、セリフ内の物語の登場人物を指示している。そこでこの場合は、何らかの形で語る行為そのものが明示される場合に限り、サブタイプD n pers.とみなすことにする。ただし今のところ、そうした事例は確認されていない。

注21 過去時称だけではなく、物語的現在を含める意味で、この表現を用いる。

注22 いわゆる現在時称だけでなく、現在の状態を表わす場合の複合過去、単純過去（汎過去）を含めている。たとえば、次の事例の単純過去は、主語の経験にかかわるものである。Dist Guïelin: 〈Onques ne vi tant gent…〉 (*Prise d'Orange*, v. 676)「『こんな素晴しいところは、見たことがない』とギエランは言った。」

④登場人物のセリフ内での状態を表わす述語動詞による空間的描写：D nm　タイプ

〉Corez tote ceste sentele!
La voie en est igax et bele.〉
(*Renard*, vv.739-740)

この小道沿いにずっと向こうまで走りたまえよ。道はきれいで、でこぼこもない。」

六、上位カテゴリーの設定

カテゴリー設定に続くのは、形式的単位の上位概念となる意味上の単位の設定である。これまでのところ空間的描写を形式的定義として論じてきたため、一見、意味上の単位の設定は考察のレベルの混同であるかのように見える。しかしながら、技法を定義することと考察することは必ずしも同じレヴェルに位置するわけではない。事実、上記のカテゴリーは形式的特徴すなわち文法上の特徴によって定義されるため、一文以上に単位を設定することが理論的に不可能なのに対して、テクストの現実は一文単位での考察をあらかた無効化してしまう。というのも、テクスト内で孤立した一単位の描写はほとんど描写の印象を与えず、事実上、空間的描写として読者あるいは聞き手に強い印象を与えるのは、複数の単位が連続して現われ、意味上の単位を構成する、いわば大きな空間的描写である[注23]。したがって、考察はむしろ意味上の単位に従って行い、形式単位はテクストの総体から描写部分を切り取るためにのみ用いられるべきである。

上位カテゴリーの定義は形式カテゴリーの定義に準じる。すなわち、ある特定の形式カテゴリーのみが連続して現われるセカンス（単純形(forme simple)と名付ける）には、そのまま形式カテゴリーの名を与えればよい。一方、複数のカテゴリーが入り交じって現われるセカンスには「複合形(forme composée)」の名を与えることとする。無論、その場合、内実はさまざまのものになる。しかし、単純形においても、その内包する空間的描写の単位はまちまちである。したがって、上位カテゴリーを数量的に扱うことは決して許されない。

注23 ロラン・バルトは『物語の構造分析』の中で通常の言語学が文を考察対象の上限とするのに対し、ディスクールの言語学（すなわち物語論）にとっては、文は、その考察対象の下限であると述べている。本論が、十二世紀のディスクールの考察を最終目的としていることを指摘しておくことは、以下の選択を一層正当化することになるであろう。

以上で上位カテゴリーの定義がなされたわけであるが、もう一つ重要な問題が残されている。それは、いかなる基準をもって、「意味上の単位」を切り取るかということである。むろんすでに述べたとおり、上位カテゴリーはいかなる均質性も持ち合わせておらず、その意味で、「単位」という用語は誤解を生じる恐れがある。そこで、これを描写セカンスと言い換えてきたわけである。もちろん、だからといって描写セカンスの定義が不要になるわけではない。統一したやり方でセカンスを切り取れないのであれば、作品間の傾向を調べるどころか、同一作品内でのセカンスの長短を論じることさえナンセンスになってしまう。とはいえ、描写セカンスはその本質上、形式的な定式化が不可能である。事実上は、以下の三つの定式のいずれかに合致するものということで、ある程度の曖昧さには目をつぶらなければならない。

すなわち、まず第一に、武勲詩のモティーフ[注24]と描写セカンスを対応させる方法である。第二に、空間的描写の対象の同一性に従う方法がある。同一のものが描写されている限りにおいて意味上同一の空間的描写とみなすことになる。第三に、空間的描写が登場人物の行為によって中断されない限り、意味上、一つの空間的描写とみなす方法である。むろん、これらの条件のいくつかを同時に満たす事例もありえるが、その場合には、最も長い物語断片を切り取れる方法に従うこととする。

以上で描写セカンス、すなわち空間的描写の意味上の単位が定義されたわけである。繰り返しになるが、描写セカンスは常に、ある程度の恣意的な面をもつのであり、またその内実は多様である。したがって、意味上の単位に基づいて空間的描写の数を数えて見たところで無意味である。一方、形式単位のほうはある程度内実の多様性があるにせよ、同一の形式カテゴリーもしくはタイプの中で行われる限りにおいて、数値比較がある程度の意味をもつことは有り得る。しかし、それにしてもあくまで参考程度に過ぎない。本論中で示される空間的描写の諸カテゴリーならびに、その単位は、形式上のものであれ、内容上のものであれ、あくまで、各事例の個別的な考察検討を今後展開するという前提の下に初めて妥当性をもつのである。

最後に描写セカンスの一例を挙げておくことにする。なお、左端の符号は形式カテゴリー

注24 Jean Rychnerらによれば、武勲詩は定型的な物語切片を共有しており、そうした切片においては、これもまた武勲詩諸作品に共有された定型詩行がほぼ同一の順番で現われる。こうした定型化された物語切片はモティーフと呼ばれ、主なものとしては、武装、一騎討ちのモティーフがある。これを、武勲詩の口承伝達と結び付けることには現在疑問が呈されているが、モティーフの存在そのものは広く認められている。

による分類を示している。すなわち、このセカンス自体は 「複合形」である。[注25]

	(Ja departissent a itant,)		[人々が評議に入ろうとした時、]
	(Quant par la vile vint errant)		[馬にのって、一人の乙女が、]
	(Tut a cheval une pucele.)		[町を駆け抜けてやってきた。]
N jug.	*En tut le siecle n'ot plus bele!*	(550)	この世界中に、これ以上の美女はない！
NM obj.	*Un blanc palefrei chevauchot,*		彼女は白馬を駆けさせていたが、
	Ki bel e suëf la portot;		馬は彼女をやさしく優美に運んでいた。
NM obj.	*Mut ot bien fet e col e teste,*		馬は首筋も頭もよく整っており
N jug.	*Suz ciel nen ot plus gente beste!*		天の下にこれ以上優美な獣はない。
NM obj	*Riche atur ot el palefrei;*		彼女は馬に豪華な馬具をつけさせていた
	Suz ciel nen ad cunte ne rei		が、天の下に、伯であれ王であれ
	Ki tut le peüst eslegier		それを買うことのできるものはない。
	Sanz tere vendre u engagier.		所領を売るか、質草にいれぬ限りは。
NM atrib.	*Ele iert vestue en itel guise*		乙女の方はといえば、こんなふうに
	De chainse blanc e de chemise	(560)	白いチュニックと肌着を身にまとう。
NM atrib.	*Que tuit li costé li pareient,*		両側からぴったりと締め付けられた、
	Ki de deus parz lacié esteient.		両の脇があらわになっている。
NM obj.×2	*Le cors ot gent, basse la hanche,*		体つきは優美で、腰はふっくらとし、
NM obj.	*Le col plus blanc que neif sur branche;*		首筋は枝の上の雪のように白い。
NM obj.×2	*Les oilz ot vairs e blanc le vis,*		目にはえもいわれぬ輝き、顔は白い。
NM obj.×2	*Bele buche, neis bien asis,*		唇は美しく、鼻筋は通り、
NM obj.×2	*Les surcilz bruns e bel le frunt,*		眉は栗色、額も美しい。
NM obj.	*E le chief cresp e aukes blunt:*		髪は巻毛で、金色に輝く。
N juge	*Fils d'or ne gette tel luur*		この髪の陽に照り返すようには、
	Cum si chevel cuntre le jur!	(570)	黄金の糸でも輝くまい。
NM atrib.	*Sis manteus fu de purpre bis;*		彼女のマントは濃い紫色をしており、
NM obj.	*Les pans en ot entur li mis.*		すそは彼女の身にまといついていた。
NM obj.	*Un espervier sur sun poin tint*		拳の上にはハイタカをとまらせ
	E uns levriers aprés li vint.		一頭の猟犬があとに続く。
	Il n'ot el burc petit ne grant,		街では、身分の上下を問わず、
	Ne li veillard ne li enfant,		老いも若きも
	Ki ne l'alassent esgarder,		彼女が進んで行くのを見ようと、
	Si cum il la veient errer.		見物に出かけない者はない。
N jug.	*De sa beauté n'iert mie gas!*		彼女の美しさは冗談ごとではなかった。
	(*Lanval*, vv. 547-579)		

[注25] vv. 550-579が描写セカンスである。v. 577のvintはほとんど直説法半過去の価値をもっており、vv. 575-578はvv.556-558と同様、人物の行為の報告というよりも、語り手のセリフである。（別の機会に詳細に論じるつもりであるが、特に二重否定と語り手のセリフには深い関係がある。）つまり、このセカンスは、先に上げたうちの三番目の基準にしたがって切り取られたものである。